

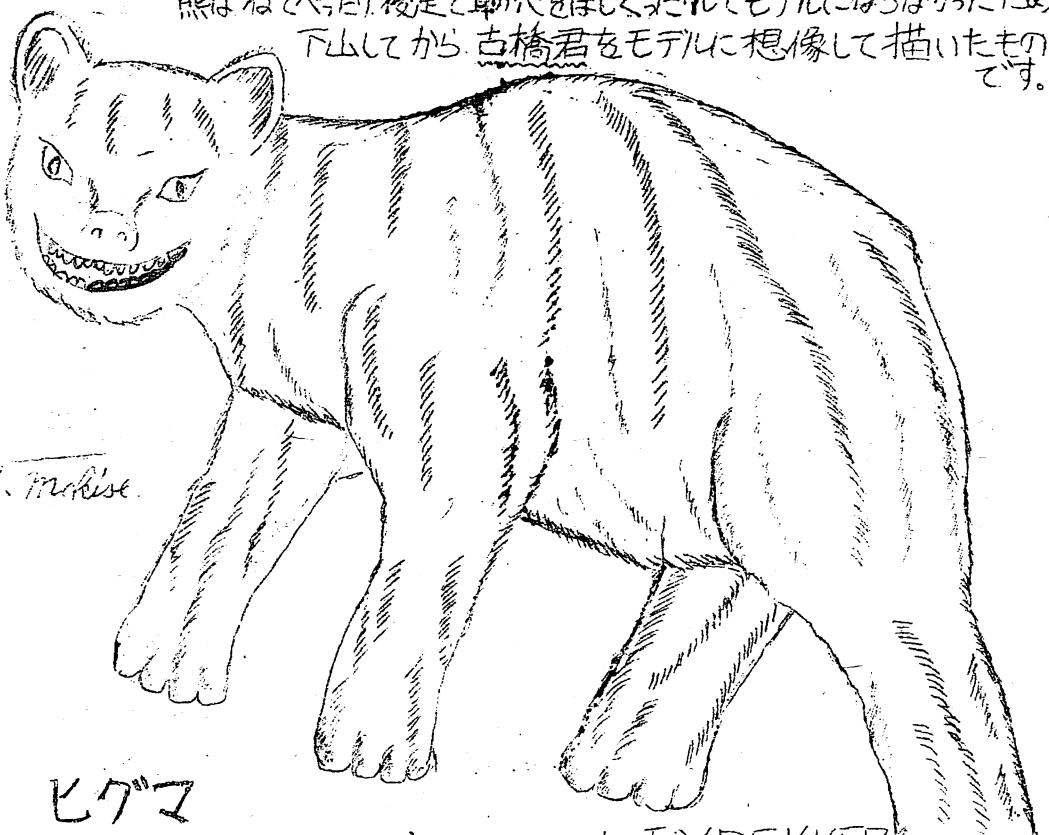
日高山行報告書

コイボクシュシリ川逆行へ

エサオマントツタベツ川下降

1973年7月29日～8月6日

[解説] エサオマントツタベツ岳東カールにて赤褐色の
ヒグマを発見。驚きと恐怖のため、手は震え、しかも
熊はねをへたり後足で耳穴をほじくたれてモデルにならなかつたため。
下山してから古橋君をモデルに想像して描いたもの
です。



ヒグマ

Ursus arctos yesonensis LYDEKKER

Brown bear

信州大学山岳会伊那松本山岳部

(1)

(1.)

——日高から帰って——（個人的な感想など） 三日記

遠い地 日高。その原金をいくつもは深くさざんで流れ去る。

はるかな青い緩線。ガスに含まれたカルの夜半。星の見え
一夜の宿。汗、ふよ、はこの羽音、いわゆりぐまと空をこ
がすたき火。広々とした十勝平野。向こうに横たわる山の峰々。
太陽への橋モモ岬——すべて今はもう実感としてとえ
がたい。それらの旅の断片だけが頭の中に来ます。

やはり 信州を離れてみてよかったです。どちらの山がいいと
いうのではない、どちらも それどれのよさを持つといふ。ただ
日高がまた人間臭さあまり感じさせないという点で
ほく自身の趣向に合つて。確かに日高は多くの音をも
色々地ではなく空へはいるのだけれど……。そして何
より、目標をすべて達成して Party 金賃が様々思ひ立
ザックに詰めて無事に下山、1TENNA リーダーとしての手^て
にはうれしい。10日余りの行動を供に(友仲内)がそれ
この小旅行 律するものがあればそれは更にすばらしいことだ。
日高の人はすばらしい。できたら何度も出かけてみたい。
そのためだ。

9月 末日



(2)

★ Member

C.L	三坂 健次	5年
S.L	服部 幸雄	3年
ESSER ESSER ESSER ESSER	牧瀬敏裕	2年
E.S.	加藤 明夫	1年
ESS	藤原 一隆	"
記録	古橋 孝夫	"

Profile

おはせかわいす、~~~~~。
 ムリリと頑張ります。気象学の権威
 運動、歌上手でやや家庭感に欠けます。
 動植物の権威
 夜遅くまで星をながめ、エセイを糸巻る
 ロマンスト姿のです。
 立原道造を説いて、自らまた詩を書きます
 人文優等生。ムリリ——。
 不作のかたまり、度々沐浴をしました。
 カニツオーネを歌う。健啖家。

(2)

■ 行動・概略

- 7月26日 午前準備、午後 松本 → 新宿 → 上野 →
 27日 → 青森 → 飯館 → 札幌(北大恵通寮)
 28日 買出し(服部は精肉ピットン) ()
 29日 札幌 → 静内 → 林道終点 コボウ → ニカシナイ沢出合
 30日 コボウクニヤマ川遊行三岐(820m)
 7/31～8/2 決済段
 8月 3日 遊行 → コボウクル → カムイカラチカラ山 継走九の次カール
 4日 継走 → エサナントウベツ東カール エサナントウベツ川 30m
 5日 ——————トウタベツ川本流との合流付近
 6日 ——————トウタベツ川標 ——————上清川 ——————幕大(解散)

★記録、ルート、他

7月 26日

午前中若干の準備(半分は札幌) 松本15時半発。新宿で夕食の後
 上野から八重田54号(12乗)。

7月 27日

朝もやの北上盆地でぬけ、9時ごろ青森。少し待て連絡船(12乗)。好天
 波なし。函館半時ほどの急行で札幌へ着いたのは夜10時ごろ。
 夕食後 北大恵通寮(1泊)する。￥150/泊人。いい奴と暑さ。

(3)

(3)

7月28日

服装 単身静内往復。入林許可証を市と車両取。他の5人は車模で買出し。
猛暑の中で気が狂ひそう。商品によってないものあり手ぬぐい。とにかく暑く、入前
からぐれたりしてしまふ。

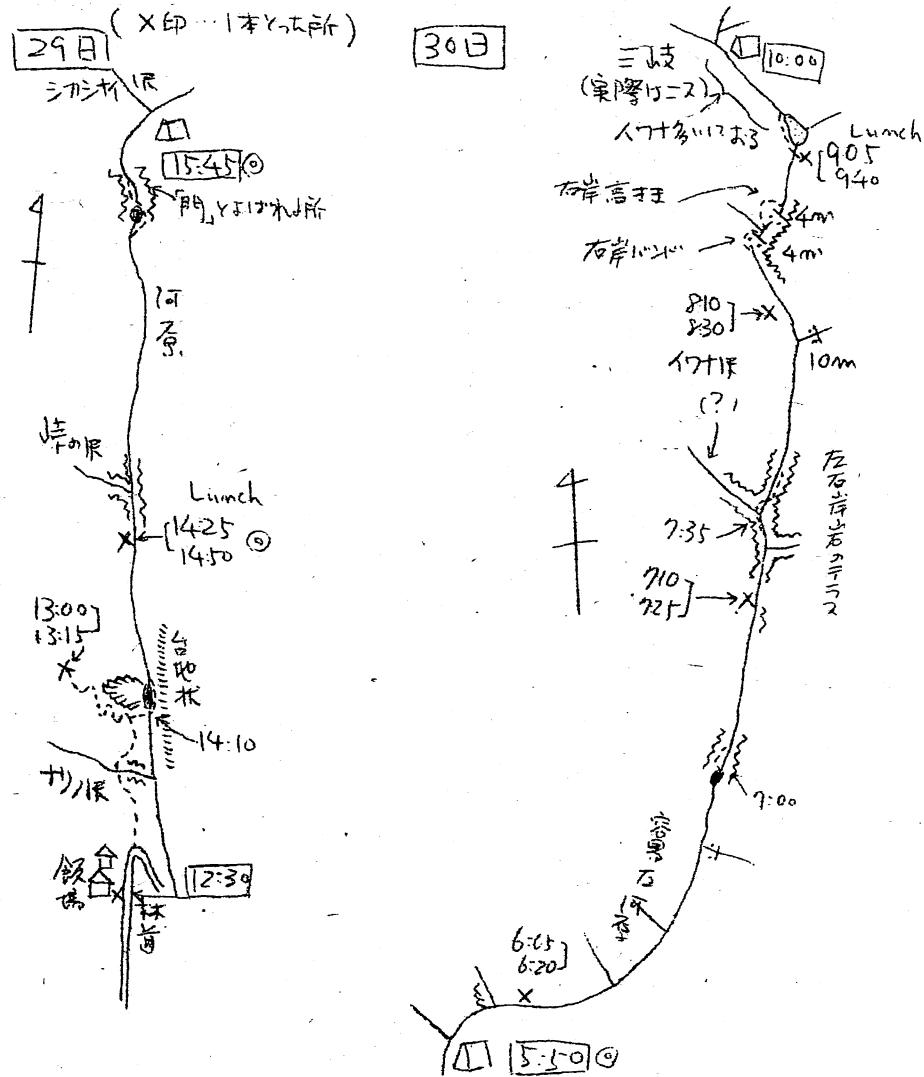
7月29日

車模 7:40発。ハチスの花の島々と見られは岸を走り、静内 10:10着。そのう
手取て木立で40分乗り、途中車の入林許可を受けて後山田へ入る。
中流部のいわゆる「遙」はすべて木道を走っていて、先人達の苦労を知
ます。五十五年、いきなりコイボクの中止流部に入る。文明のありがたさと
嘆息すると思ふ。食事場で道を開いても食糧を得無いので、そのまま出る。
すぐ石岸の踏み出しへはいりすぐにはり(IRE度)。まず Fj ドアン。小尾花
を越くまもなく崩壊地へ。下は深やうるのでそのまま踏跡でたどり崩壊地
の上へ出るが道は更に上へ向かって(上へおり)様子が無いので、思ひ切
り進む。少しの手前のやがて伝て川へおり立つ。立ち止まつてない。岸
は幸い左岸の岩棚などを適当に避け、まもなく河原、やがて少し暗く
なり、せまい岸の狭い出合をすぎると、ゆるく河原が続くようになる。
水は思ひの外が冷たくなる。魚の影などが認められる。しばらくして
静と两岸のせまな所をぬけ、再び開けた食事場のテナシナイトに出る。
誰か人のテントがある。雨は降りそうもないが、フライの片屋根の痛
風通いが多い。夕食はおいしいが、夜になると何かといふの音が
いるよう気がしてくる。静かだ。

7月30日

夜中雨が「うついいでs」、五時ほどの朝食
あらじてつけて出発。15分も走ったあたりで、もう Fj のからじの所まで走り
切れる。マコトミ下川からじで、その岸壁は川原まで長い往傍
(はなぐら)傾斜、右手から小さな崖がはいつく先で(静の右岸を走り、
左の先で)廊下状となる。左岸からせまい狭い右岸から、10m(?)の出合に
所がかる。南西積みの土引ききらく、赤布がある。その先のコルシジモ水量
少ないので、下手に高くこじる。右左岩の岩門アスロードを適当に渡り、
途中 Fj 渡る。河原がしばらく続いて左岸に10mほどの崖壁。
あたりを走ると、遠く青く縦線が望まれ、塔の位置の
ところ頂が見えが何かやがる。木は左岸に向かって傾斜して岩盤に
えぐって流れ。木が右手へ折れ所の崖で右岸のバード伝いに、その
先には右岸の草のレンセから越す。次の河原を歩き木が左に折れば

12度雪があり、次の先アリは少しある傾斜を増し、大きさ二段の臺のすぐ上がいわゆる三段階である。予想していた半分ほどの時間で着いたがこの先カールまでよい天場がないところなのでここを終點とする。(結果的にこの先の次段階のためにまきも食糧もこれよりが一等地だった)テン場整備後M1、K2、今夜のおかずを同様に出かけた。夕食までの間30cm前後の雪を1.3匹。かくして4日間のイワナ釣り大会の幕明けとなる。獲線はカス。夕食は冷やっことペヤドロ自作。満足! 夜12時まで雨。



31日 沈陽

夜半から本格的になると、大雨で 20~30 cm 増水。やや震る。一日ぶりに「雨を味わう。(モリ)」とトドリの声。1日陰、下りやくだり。食う。寝る。飲む。
22 番地北左衛門 Eki & Mak. のオソイ歌聲に悩まされる。

8月1日 沈慶

1日 気候
相変わらず降ったりやんだり。水量がわらず。平地でもさのうすからり降?
水不足と猛暑から解放されたとか。(かくこくづけあつ)がなくなく。
夏型がすましくずれてしまってまた晴れると見通(ほろ)。
一日金うつて暮らす。

2月 次候文

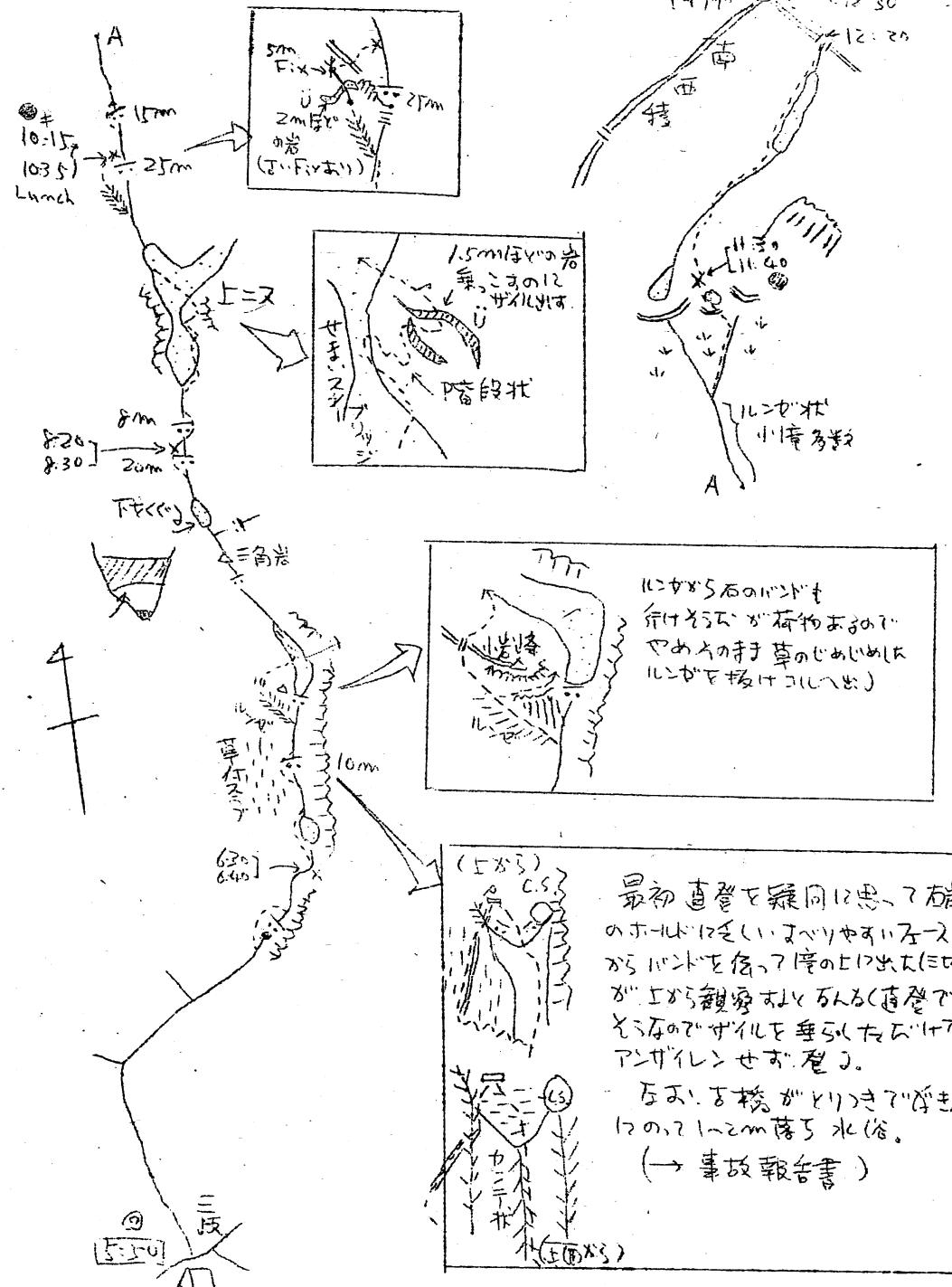
2日 水位最高。準備は怠りなくこなすも百らぬ。遅退際
幸い夜は雨の中止やれり。1つめお出でで食事行
かれり。ネズミが「出俊」米の袋をかいられ 中がぬれて腐る前食
えずす。ネズミが「出俊」米の袋をかいられ 中がぬれて腐る前食
えずす。午後降雨停止。おけすらかあらわし。
達成、メテクシ。午後降雨停止。おけすらかあらわし。

3月

その手後から雨は降らず水も最初より20cmくらい多いが最高時を
くらべればかなりいい方に順りもへた。木の林蔭によると我々
ペースをうちよく予定より早く抜けられやうので前進を始めた。
最初の崖のあたりから石ころから岩盤にかわり核心部ではいよいよ二つの
崖でややまとまはづけらずスムーズに進んでが豊富な瓦礫のあたりで
のあたりからガスマスクされ雨も降りだして憂うつ。崖のシルバー今は
寒々としてものでいかない。最後の崖を越すと急に水流は弱り、向むく
お花畠を横切てカーブボーデンに出る。晴れ天日ここに横たわり
一日を過ごすここでどんないい夢みていくの?。今はそれも許されず
矢は通す。ガスの中にはまだ南西側のギザギザ(木影)を左上に見て

とあります(木の奇頭のかじきはさして上)。かじきの南東の脇へ出一急坂
あこがれの頂に立つ。冷たい雨とカスの中で南と北も望まれる。表界
は無用北へ向かって縦走を始める。稜線は思ひより踏み跡がある
し、メリ(ア)ヒトガタか。根元で西側が切れていて岩がち、思いのほか
起伏が多い。9の保カルの土の稜線上にテニ場が造成されてい
く(11月場とす)。Muk, K, Fr の三しきカルヘ水 \times ナリ。雨でもさ
濡れたハイツ(けいをうけ)の二苦勞。からだがさす、カリ われ 寒い。

3日 (縦走部分(北西))



8.11

4日

誰か今日のこの天候を予想(下下)。F)の言うように神の存在を信じていいのかかもしれない。ぬれた服が寒い一夜だった。夜中に目を覚ますと雨音が聞こえないはずだが、なんと全天子は早いほとりの星空。夢か?と思う。日高の種猿の夜明けは早い。3時すぎに東の空が明かくなる。次第に明さを増してゆく空の下で、あのカールが堂々Tヨヒラミダリの小宿を我々にはじめさせた。そのためにXの雨。日高の半分がさえぎられて見えないのは残念。アリスが。誰もがこの小猿の静かさすばらしい夜明けの一時を忘れないだろう。

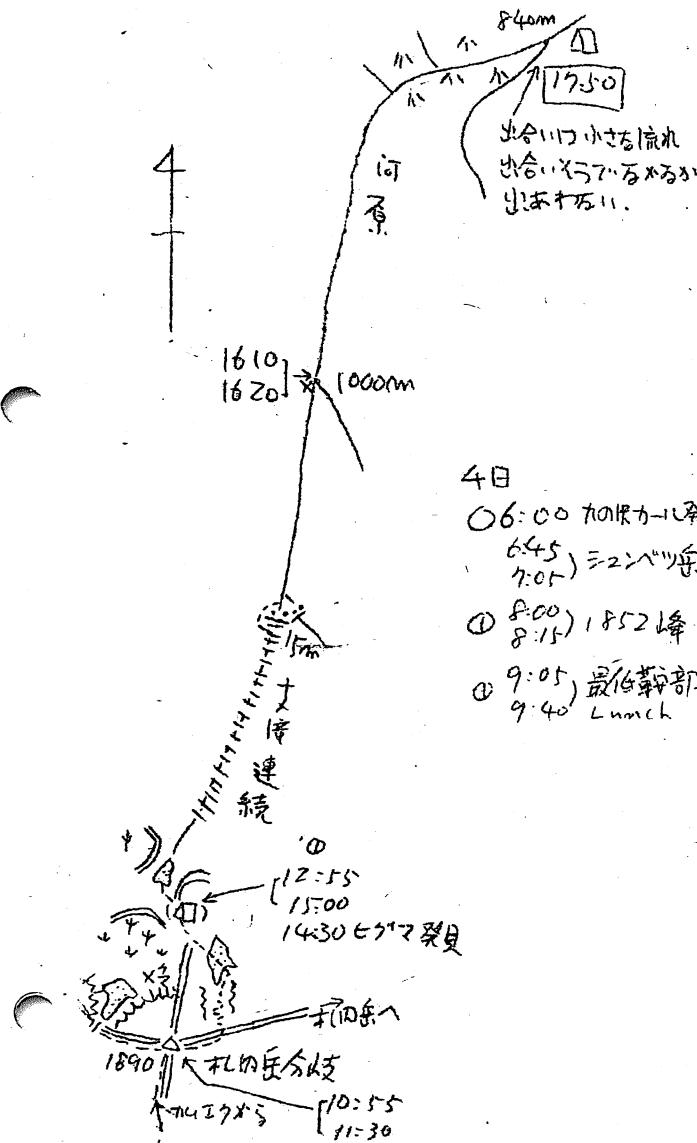
北への縦走が続く。景色のことはいくら書いつづきがない。それ故への今枝点? この余縦走は終まる。カムイクモ今はほんの遠くて小さい。それ故への縦走を下りて左のカールへの踏みあいに入る。(手石の多いルンゼ)を下り、雪渓の木きを通り横切るとカーレボーテン12つ。手引はここまで、あとで容易T21R T21L? 上、下、中、日、街に出でる。思いがそのままさせてしまう。氷アシキを作って一かん食べてしまおう(これはP.F. 12月5日: この日のためのものだ)。各自ぬれものを乾かして、顔を洗ひたりフンドシを洗う(洗い方).... す、かりくつろいでいた時、Kが上の木花鳥に動くものを見た。ヒグマ? まちがいない。意外かわいいのか? 夜訪問を受けたのは国とて即解散後、Kを下すことになる。丁度と急かせぬせいか、ひといハッキングの人、Tとすべて人なし。ありけり。ナメ寄ぬしほうく続き。最後の15mの境は左岸の足跡を立てて下る。ここから急に下(まゆくなり)岩盤もかれ。安心感から疲れを覚え。1000mのニヌヒテニ場がある。更に下り840m=又行近(テニ場を作)。地図から、広い河原を想像したのが意外にせまいところだ。イツナの影はすいぶん見かけないけれども、小さい。長い一日であたた。

5日

朝はゆく、ソノダ! 感覚からざるも不足気味で、まゆ。カムイの2ルPartyが通りかかるので、ヒグマのこと伝え、トトロツの木の下はササギ(リ)。北海道らしい景観である。下流の廊下は青黒い岩の中にまつたる岩脈が走りすばらしい。トトロツ車流に出、下の中州を自場にする。青い空、まぶしい太陽。あのカールの中ではなあと思うが、モテや心は即ち飛ぶ。今よりも下がほんと釣れず。タチ釣り人が3人下りいく。人の多いせいだろう。半日あまりぬれ物は乾く。(河原が広いので、夕食後の火は豪華にや)。これで日高とも下りれた。

4日

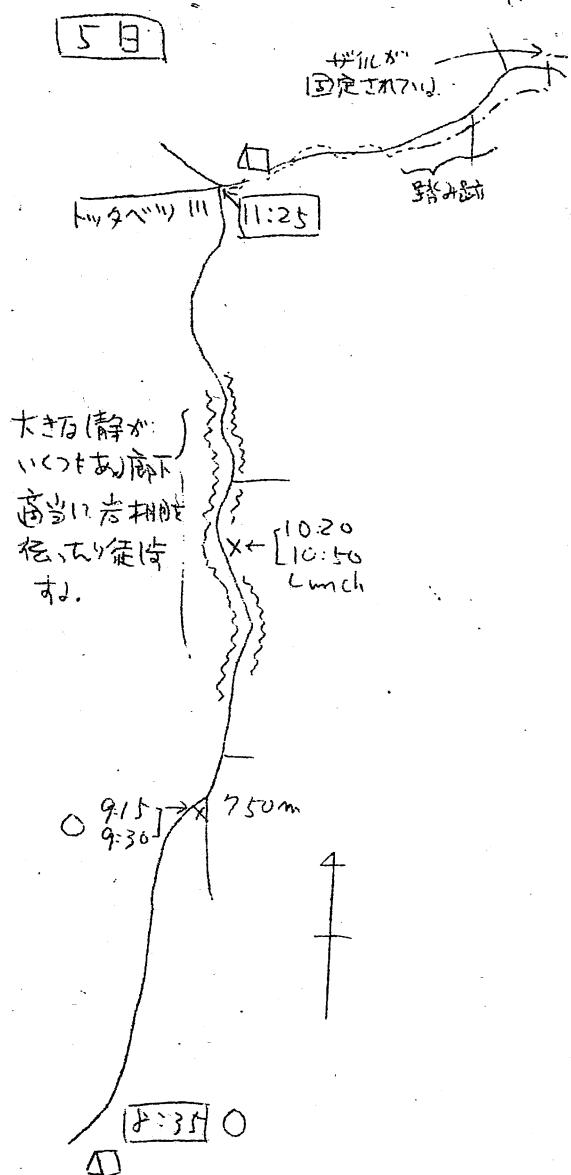
(総走行距離除外)



4日

- 6:00 カルガル発
- 6:45 ミニベツツ
- 7:00 ベツツ
- 8:00 1852峰
- 8:15
- 9:05 最後鞍部
- 9:40 Lunch

5日



6日

6日 昨夜に1度いい雷雨で20~30cm増水(図)。テンヤ場の前から

徒歩がけ(13km)。人には2つ腰掛けて入り、きのうせっかく草刈したのも
ムダになる。4.5回徒歩をくり回し右岸の明壁石踏升(道)12
はいり。途中IIIのふちで突然道は消え対岸に移っていく。水流強く少
し流れていて固定ザイルの石と3度。この先道はほっきりして左岸の
IIIがうね(高い所)を多く。向むくる本木道にあり、トウタベツツ川橋で1本。
20kmもの木道歩きがはじまる。ところがそこを出すぐ

(9)

下から上がりきりまなぐさく引きこもった人蔵口で捨られる。何という幸運である。
車は直ちに山(山)から十勝平野の一画へ出て、立派と云つて鏡く
鏡く道路を走る。たまたま遠ざかっていく山高の山群を眺め、長くも樂
しかつてこの10日間の日々を思ひ立派へていつづけ上情川といふままで
西部の舟宿村みどりの小さな町に着く。車からの平原と小さな町におけるこの
小行の片ナシにふさわしいものであつて。

17:00 発	9:15 トツベツ川橋	10:30 上情川
8:15 [最後の延候] ②	9:30	11:30
8:30 終わる。59km	9:35 車12の2.	12:10 帯広駅 下山車路後解散。

(ルート記録：牧瀬、腹部、三段)

* 各係多者 なし (今後のため)

(E.S.) ○ 買出しけれ全部こちらで(?) はい。(商品の種類のちがい、土地不詳)

○ 内容(計画書参照)は夏合意で万が一かよが、て。冷や、ご suite!

(E.S.) ○ フライけ快適? "おが、雨國の日のための2次車は必要。

(小行前にこの指示があつたが、さやえの熱意が僕に欠けていた。)

(X.M.H.) ○ 小行前に計画、メンバー係の変更が ていて、これがそのための時間が不足し、上級生が主体となる、計画を進めて(まだ向こうが)ある。小行中も限られた時間内での作業量が多くどうアキラム手が出てます。)(一年生はそれでもよいと言ふが...)

○ 最終的計画の決定が遅かるので全部量に知らせる方法がやはり手をつくって何らかの方法で部員が知らする手配をできなくて

○ 第1回小行中ほんと便れるか、たが、地元の人達は先走るから常にふきり鳴らしていいといふ。見習うべし。

○ 遠くへ行くとき着換えはきのままで小行中も持つてあるので、たゞへんづね。

○ 現地解散してあと好きな所へ出かけ形式でいい。小行費(は支度費)で 8000~9000円 他の小行中の食費は安い小行での食費はばかくならぬ。

(まとめ: 三段)

(ii) 日高山行

古橋孝夫

小生、日高山行の参加については最初は參えました。まず金銭的に問題が大きく前に立ちはだかりました。なにしろ北海道と言えば旅費だけで、一万円近い金銭が必要になりますし、まだそこには食費etcを加えて二万円ぐらいと見込み、それを考慮してアーバイトにてかせぐなら、そのようなことを考えていると、とても-----と考え、今之内に行かなくてはもう行けないかもしかないと考え、思い切って参加したらしいです。しかし結果論的にはなるかもしれないが、私はこの山行に参加していろいろな面でアラスになつたし、またそれなりに私の山に対する無知が少なくてなつたと思っております。しかし金銭的な波及は夏の合宿にまで現れています。私の他の人に金銭を借りるという事態にまでおひこまれました。そしてその子波が今日まで続き、今テスト前であるというのにアーバイトにあげられております。ところで山行に説をもどすと曰高いや北海道の山というものをこの目で見て、やはり信州の山々と違うと感じました。山自体は土ほど高くないのですが、緯度の結果雪渓の現れる標高が低く、また植物etcの面で相違があったように感じました。また熊に実際に会えるとはまったく考えてもいませんでした。そういういろいろなことが多かった今山行ですが私には一生忘れぬ山行になつたことを書いています。

(2) 夏の思い出

加藤明夫

僕の今年の夏休みは実は実にはかなく、そして寂しいものでした。でもそれは思うと思わず微笑みたくなるようなそんなに暖かいものでした。でもそれは確かにあたのです。短かいものでした。

僕は一人の髪の長い少女に会いました。少女は清楚で慎まじやかな、そら山の花にたどるならあり岩陰に咲く、可憐なきつね草のようなそよんむか少女でした。時には憂いに沈んだ瞳が、気にかかるそよんむか少女でした。それはあまりに柔しく、寂しく悲しくそして短かい日々でした。別れの言葉も交わせないまま二人はやかれたのでした。否、別れという言葉はこの場合、適切でないかもしれない、でも僕には確かに別れでした。9日間の長い山行をお互い、帯広に下山しました。少し時間があったので、帯広の町を歩きました。一軒の土産物屋に入りました。どれも僕の心を動かすほしませんでしたが、たまたまだけが、それがラスチスの片すみに小さな箱が転がっていました。お店の人からいかにも圓どうくさうに出してくれたその小さな箱の牛には木でできた小さな指輪が入っていました。このこけ茶をした小さな指輪には、髪の長い少女の横顔が彫ってありました。それには2000円の商札がついていました。僕はポケットから財布を出してみ手ました。でもそれにはほ人のちょびりしかお金がない、ほいくていませんでした。そんなことは分りました。でもそれにはほ人のちょびりしかお金がないことでした。でもそれでも一度数えてみたかったのでした。僕はタカの上から、たたかれて出てみました。北の国つ空はそろそろ赤く染まろうとしていました。そして僕の短かい夏休みはその時に終りました。

カムイエクウチカウシ 9の三カール上部の朝

藤原一隆

こんな素晴らしい夜明けが来ようと誰が思つただ
ううか？夜明けは冷たい大気の中に立ちつくし、僕
は東の空を見つめていた。昨日、そら昨日はつらか
った。でももう過ぎたことだ。今、大空には雲一つ
なく眼を西に向ければ眼下に雲海が見える。もうす
ぐ陽が昇るにちがいない。日高の山々はすみまた
空の下にまんじりともせずに、うすくまるようにそ
れを待つていろかのようだ。あやしむ十勝幌尻
そして内丘、地図を各手に山の名を一つ一つ覗
しけにゆんでゆく。南に大きくそびゆるのはカムイ
エクウチカウシ山。名をかみえうな名。小さくつぶ
やいてみる。カムイエクウチカウシ。

それには長かった行程であの山を越えた満足がひ
やられていた。北には今日の行程の山々が遙かに連なる。
その山脈の彼方、うす青くしかし空の青ニキリも透
くうかび上がりていうのは大雪の山々。

さだかならぬ気配がしたいに東の空にしおり
うがひかれてゆくかのようす雲が高まってゆく。
と突然、うちはなれた先峰につき土さる。最初の
光がカムイエクウチカウシの頂を見えた。光はカムイ
エクの先峰を赤く燃えあがらせした。いに下だってゆく
峰によせてカリさかれた光が斜に谷へとさしかけて来る。
ほほにあたる風は冷たかったが、心の中にはあの光
のように燃えあがるものがあった。ほろほろ北海道
まで何をしにゆくのかという問いに対する答の重さ
がこの瞬間にかけられていたかのようだった。4日続い
た雨はきつからかいこの瞬間のためにあたつ
だといか思えないようだ。た。昨日冗談に
「明日もし快晴になれば」僕は神の存在を
信じると言ったのが今日高情有のナイ
フリッジの山稜に立ち大空の中に風を聞いて

いふと人間の小ささに対する大きな存在を信じる。登山は人生と同じように徒労にしかすぎない。しかし徒労を越えた何かにするのは人生と同じく自分に次第である。大きな満足に僕はまじりともせず立っていました。

山頂にて

こうして

黙ってすむつていると

風の中

青空の静寂が聞こえます

すると何もかもが小さくなり

流されてゆく冬雲のように

僕の頭の中

うずらめた懸念が去ってゆきます

そしてからっぽになった頭に

青空を注ぎこみ

僕は

永遠ということを考えています。

(藤原一隆著)

日高山行で見た重點

- ヒグマ
- ナキウサギ
- シマリス

・ヒグマについて

ヒグマは本州に住むツキノワグマより大型で、性質も狂暴である。ヒグマは北海道に約3000頭といわれ、毎年500頭前後が獵捕獲されているが、自然繁殖もあるのでその数はほとんどへうない。ヒグマの被害は昭和36年から昭和45年まで10年間に22名が死し、37名が傷をおい、毎年数百頭の家畜が殺され、農作物も毎年1000万円前後のやりで荒されている。登山者がヒグマのために直接被害を免げることはきわめてまれではあるが、昭和45年の夏には、日高のカライエクウチカウミ山などの茨カールで福岡大のWLV部員3名がキャニフをおそわせて死んでいた事件があった。山を歩いているとチシマニンジンなどの高山植物の根を、畠のように垣籬りおこして食べたりあとがよく見られ、また新しいクソや疋跡を見つけることもしばしばある。また大雪山や芦別岳では、人間にまれ、人間のあとをつけられればエサにありつけろと思ふこんだヒグマが、登山者の前に出没して大土蜘蛛にならうこともあった。こういう場合でも、特にヒグマを興奮させなければ危険なことはないのか普通だが、いずれにしてもヒグマに注意して歩かねばならないのは、北海道の山歩きの一つの特徴である。

Topic (1)

中華人民共和國

（三）本年正月，蘇東坡被貶海南，其子蘇軾、蘇過、蘇迨隨行。蘇軾在海南島生活了四年，著有《東坡全集》。蘇過在海南島生活了六年，著有《海南珠玉集》。蘇迨在海南島生活了七年，著有《海南集》。

「我將軍之子，名曰子雲。子雲生平好學，博聞強記，著《新序》、《說苑》等書，皆成於此。」

七九廿四時止我父久今回少出行之日暮於金口道口
上古驛西三里村中廿二年正月廿一。

彼(おのれ)は歩行者、距離 $= L = 300\text{m}$ 和 駐車区
「左上進出」を走る。

トグマは、我々がニホンヒゲに付属する漸減する。其の後、彼が設置するすべてのバードケージは木の林の中に位置する。ところが、太陽が昇りますが、また或る種の鳥が木の枝に落ります。木の枝から上方へ移動していき、木の枝下に止ります。トグマは一匹だけ木の枝に止まります。

其心在焉。故其聲無違也。若以爲子雲之賦，豈不遠哉？

「強引にやった作業がほんとうです」。荷物を片付けるとおもふまでも30分もかかる、こしまりました。やはり被雷精神的に動搖しないでモロと感心します。

尚、二つ作業中、時折ビク적으로見えていた。彼は突然血苦としていた様子で、日本たばこ、ニコチンかに寝そべったり、転したりしながら、昇降をくり返し、追跡への気配はありませんでした。我々が危険を知る奈ルと判断してから、後退び頭をかくナガの余裕を出せる様でした。

やがて、準備もとどかい、各自、強烈な感覚を胸に移し、一路、安全な場所へエサオマントックベリリバ下降を開始しました。

— 古検記・加藤 加筆 —

・ナキウサギとシマリスについて

ナキウサギは大雪山や田高山脈の涼しい岩疊地にすむ、ちよっとみると、ネズミのようなくち短かいふさなウサギである。時にキチーと鳴きながら岩の間を飛びまわる可憐な姿を見せることがある。またシマリスは中に黄と黒の美しい縞模様のある小さなりスの毛の上などにちょこんと乗って、ハイマツの美などまであそんでいることがよくある。

・アイヌ言語の山名

○カムイエクウチカウシ
(熊が岩屋を休みはずして下へ落ちるところ)

○エサオマントックベリ岳
(水渓が曲流して、両岸が絶壁になつて川)

PIC (2) 日高の岩魚釣り

藤原記

	30日	31	1	2	計
三坂	5	/	1	7	14
服部	0	3	3	0	6
加藤	4	0	1	0	5
牧瀬	1	1	2	0	4
藤原	0	0	0	5	5
古橋	3	0	3	0	6

40

私たちは日高山行の目標として岩魚を一日1匹釣ることをたてたが結果は二三人の通り大勝利であった。3日間の沈没船は退屈であったが岩魚釣りでその無聊さをぐさわられた。日高の岩魚は人なれしていないせいか、えさをつけた釣針をなげこむやいなやくいついてくるすさまじさでかえってえさのかわづらの幼虫をさがす時間の方が釣る時間より長くかかるた。40匹を3日間で食べたのが一人2匹1日2枚で当てて最初はおいしく食べていただか3日目となるとげそりしてしまい加藤君のみが盛んにはくつき、他の者は横目でそれを見て「よラヤる」という始末。

表を見ても三はわかると思うが、三士友さんがそのテクニック?を生かし、他のものを寄せつけず1位。御走体ながら実にござります。な働きぶりでありました。2位は服部さんと古橋君、3位 私めと加藤君 最下位 牧瀬さんと順位であった。このワタクシ 2日間一匹も釣れずみんなからばかにされましたので悪魔に魂を売りましたとさえ辞せずといらいきごみで執念の鬼と化し見えますにすさまじき少しの間のうちに5匹も連続して釣りあが他の方の鼻をあかしたのである。しかしあカリのまびのまきり岩魚を持ちながらすがってここんだのは實にみっともないことでありました。

岩魚という奴實に恐しき生き物でありまして股もたを全部出したあとくしゃくしゃにしてようとするもう心臓をな

いやせして ひよんひよん えびはね、一瞬あせらすには
おられませなんだ。骨つ木にはかけ3ラウの効玉がきっしり
つままでおりまして食べるものがでれくろいしかないので効
れた奴は全部 ゆうに 30cmはありました事な。ところ
か 私たちが エサオマンヒッタヤツリへおりて釣ましまし
たところ釣れうつは實に 10cmほどのかわいいもの
しかあらず 川によって 實に 異なるので ないかと思われ
る。

イワナ釣りにおけるタイプ

オーネドックス型
カリオの一木釣型
おぼっちゃん型
職人型
釣り堀型
無造作型

三坂
吉橋
牧穂
服部
加藤
藤原



◎日高の蝶 牧瀬

日高山脈はその規模において北アルプスをしのぐものであるが、その広大な地域で今まで特産の蝶が見つかっていないのは、非常に不思議なことであるとある本に書かれてあったが私は新種を見つけるつもりで注意していたが、残念ながらついにその幻の姿は見ることはできなかった。

それはさておき、今回の山行で見られた蝶をここに簡単に記しておきたいと思う。

特に目に付いたものとして、コイボクシユビキョウリ及びエサオマントツベツリ西川において北海道特産のエゾシロチョウ、アカマダラを数頭確認することができた。また同じく沢の中においてコイボクシユビキョウリではキバネセセリ、エサオマントツベツリ及びトツベツリ川では、エルタテハ、シータテハ、クジャクウツクベツリ、キベリタテハ、コムラサキなどのタテハ類にミヤマカラスアゲハが何10頭も群がり、その個体数の多いのは本州では見られないものであった。稜線上やカールまた沢においても、本州では高山蝶と言われるベニヒカゲやコヒオドシが目についた。その他、沢にはゼブルスが多く見られ、それらは捕えてみないことには種の同定が困難であるが珍しいものが多いものと思われる。

◎日高の植物 牧瀬、三坂

本州に住んでいる我々にとって、北海道は植物の特産種が多い点においても大きな魅力である。以下、この山行で確認できた植物を掲げてみた。(順序は見られた順)

〈コイボクシユビキョウリ川林道終点→三坂〉

ミヤマカラシ、ホニシモツケ、イワツメクサ、フキ、ナガミアズキ(*Salix*)
カンバ(*Alnus*)

標高820mの三坂付近にイワツメクサが見られた。(中部山岳では、普通2500m以上の高地でしか見られない。)

〈三坂→コイボクカール〉

ミヤマタケモンジソウ、クロクモソウ、イワツメクサ、チシマフウロ、
ミヤマタケモンソウ、サワホウズキ、ミヤマキンポウゲ、ウサギキク、
エリツツジ、イワブクロ、ヨツバシオガマ、エゾシオガマ、ウコンウツギ、
アオノツガザクラ、エリグンナイフウロ(?)

コイボクカールでは霧が立ちこめていたが、高山植物が五色に咲き乱れる美しいカールであった。

〈船山のカツラ山、→エサオマント、タベツ岳、縦線上〉

イワブクロ、チシマキキョウ、アオノリ、ガサクラ、ツガサクラ、ウサギスケ、
リンネソウ、エゾオナマノエンドウ、ミヤマキンポウゲ、クルマユリ、
チシマフウロ、タカネタンポポ、チシマフウロ、ミヤマアズマギフ、
テンクツワガタ

大規模な高山植物群落は全くなく、ほとんどハイマツが生えている。ヒアルフスなどに比べ、規模は小さいし、個体数、種類数とも多くない。

〈札内川9の沢カール〉

ウコンウツギの大群落。コイボツカールとは対照的で、景観はウコンウツギの単一植生のような感じがした。

〈エサオマント、タベツ岳東カール→ト、タベツ岳出合〉

エゾリンドウ、ミヤマキンポウゲ、シナノオトギリ、キハダ、
ドロノキの類 (*a. populus*)、トネリコの類 (*a. fraxinus*)

花が咲いているものが少なくて、目立ったものはなかった。

信州大学山岳会
伊那松本山岳部

1973年9月30日印刷
10月5日発行